鷹島町文化財調査報告書　第３集

鷹島海底遺跡Ⅳ

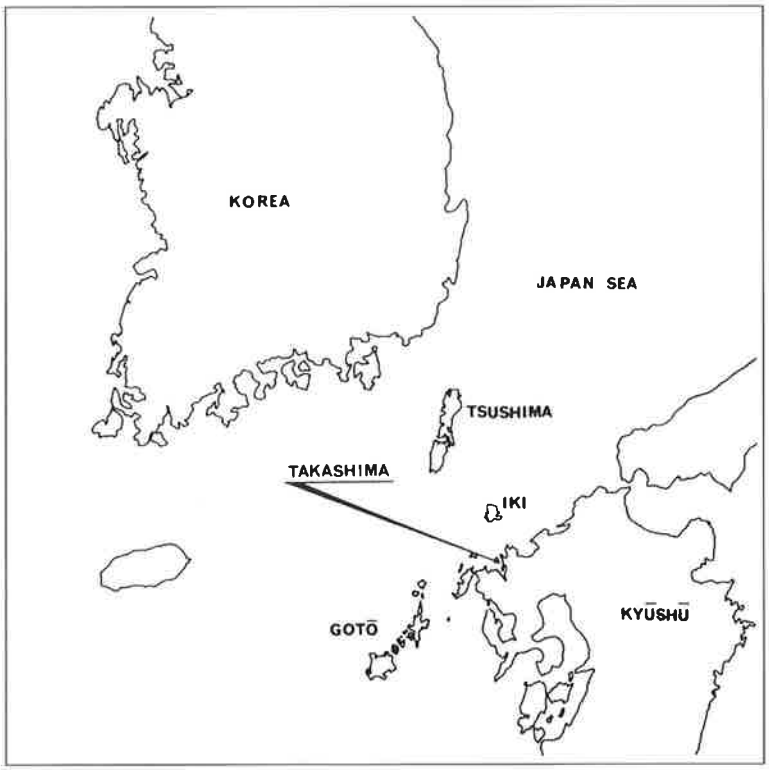
――鷹島海底遺跡内容確認
発掘調査報告書①――

２００１

長崎県鷹島町教育委員会

鷹島海底遺跡Ⅳ

鷹島町位置図



はじめに

このたび、鷹島海底遺跡（神崎地区）において遺跡の性格を把握するための発掘調査を行いましたので、ここにその報告書を公刊いたします。

鷹島町は、長崎県の北西部に位置し玄界灘の荒波をさえぎるように伊万里湾の入口に浮かぶ島で、歴史的に元寇の役の舞台となったところとして知られています。

本町では、「鷹島海底遺跡」において元寇に関する遺物を調査するため、1992(平成４)年から1999(平成11)年まで、九州・沖縄水中考古学協会の協力により、発掘を伴わない目視による潜水調査を行ってきました。このことにより褐釉陶器をはじめ、磚、碇石などの遺物の散布状況などが少しずつではありますが、わかってきました。しかし、これらは目視による調査であるため、礫海岸になっている部分では遺物の確認をすることができますが、海底が砂地になっている部分は緊急調査の対象となった場合を除いて、確認されておりません。

今年度は国宝重要文化財等整備費補助金（町内遺跡）の補助を受けることができ、平成12年７月29日から８月７日まで小規模ではありますが、発掘調査を実施することができました。

今後も、こうした文化財の調査、研究は極めて重要であり、郷土の埋蔵文化財に対する理解と認識を深め、更なる調査研究を推進していく必要があると思います。

この調査にあたり、それぞれの分野から御指導と御助言を賜りました調査指導員の諸先生方の御努力に敬意を表すると共に、最後まで協力いただきました九州・沖縄水中考古学協会、その他関係者各位に対し心から感謝を申し上げまして挨拶といたします。

平成13年３月31日

鷹島町教育委員会

教育長　安部恭一

例　　言

一　本書は、鷹島町教育委員会が、平成12年度～17年度までの５か年計画で実施している鷹島海底遺跡（北松浦郡鷹島町神崎地区）範囲確認調査の平成12年度調査分の結果報告書である。調査は、平成12年７月29日～同年８月７日まで、国庫補助事業で実施した。

二　本書の作成は、林田憲三（九州・沖縄水中考古学協会）の委託調査報告書に基づき、松尾昭子が行った。

三　本書関係遺物は、現在全て鷹島町埋蔵文化財センターに保管している。

本　文　目　次

第１章　調査の概要

1　調査に至る経緯……2
2　調査の目的……3
3　調査の組織……4
4　調査期間および調査日誌……5
5　調査区域……10

第２章　調査の方法と概要

1　調査の方法……11
　調査区設定……11
　調査方法……11
2　調査作業の安全対策……12
3　調査作業の安全基準……13
4　調査の成果……13
　土　層……13
　出土遺物……14
　まとめ……16

挿　図　目　次

Fig.1　調査地点位置図（海上保安庁水路部作成海図）（１：50,000）……1
Fig.2　鷹島海域と調査地点位置図（１：25,000）……17
Fig.3　調査位置と遺物採集地点位置図（１：1,000）……19
Fig.4　１－Ａ～Ｃトレンチ北壁土層断面図……21

図　版　目　次

PL.1　基準点Ａの設置風景……22
PL.2　基準点Ａより離岸堤へベースラインを延ばす……22
PL.3　褐釉陶磁器四耳壺(No.3) 確認状況……22
PL.4　磚(No.9) 確認状況……23

PL.5　遺物確認地点計測風景 ……23
PL.6　1－Aグリッド発掘風景 ……23
PL.7　1－Aグリッド北壁土層断面 ……24
PL.8　土層断面実測風景 ……24
PL.9　調査グリッド出土褐釉陶器 ……24
PL.10 調査グリッド出土磚 ……25
PL.11　No. 1 磚 ……25
PL.12　No. 2 磚 ……25
PL.13　No. 3 褐釉陶器四耳壺 ……26
PL.14　No. 4 褐釉陶器壺 ……26
PL.15　No. 5 磚 ……26
PL.16　No. 6 磚 ……27
PL.17　No. 7 －①磚 ……27
PL.18　No. 7 －②磚 ……27
PL.19　No. 7 －③磚 ……28
PL.20　No. 7 －④磚 ……28
PL.21　No. 8 磚 ……28
PL.22　No. 9 －①磚 ……29
PL.23　No. 9 －②磚 ……29
PL.24　No. 9 －③磚 ……29
PL.25　No.10磚 ……30
PL.26　No.11－①磚 ……30
PL.27　No.11－②磚 ……30
PL.28　No.11－③磚 ……31
PL.29　No.12褐釉陶器壺 ……31
PL.30　No.13－①磚 ……31
PL.31　No.13－②磚 ……32
PL.32　No.14磚 ……32
PL.33　No.15磚 ……32

表　目　次

Tab.1　緊急事故発生時の連絡一覧表 ……12

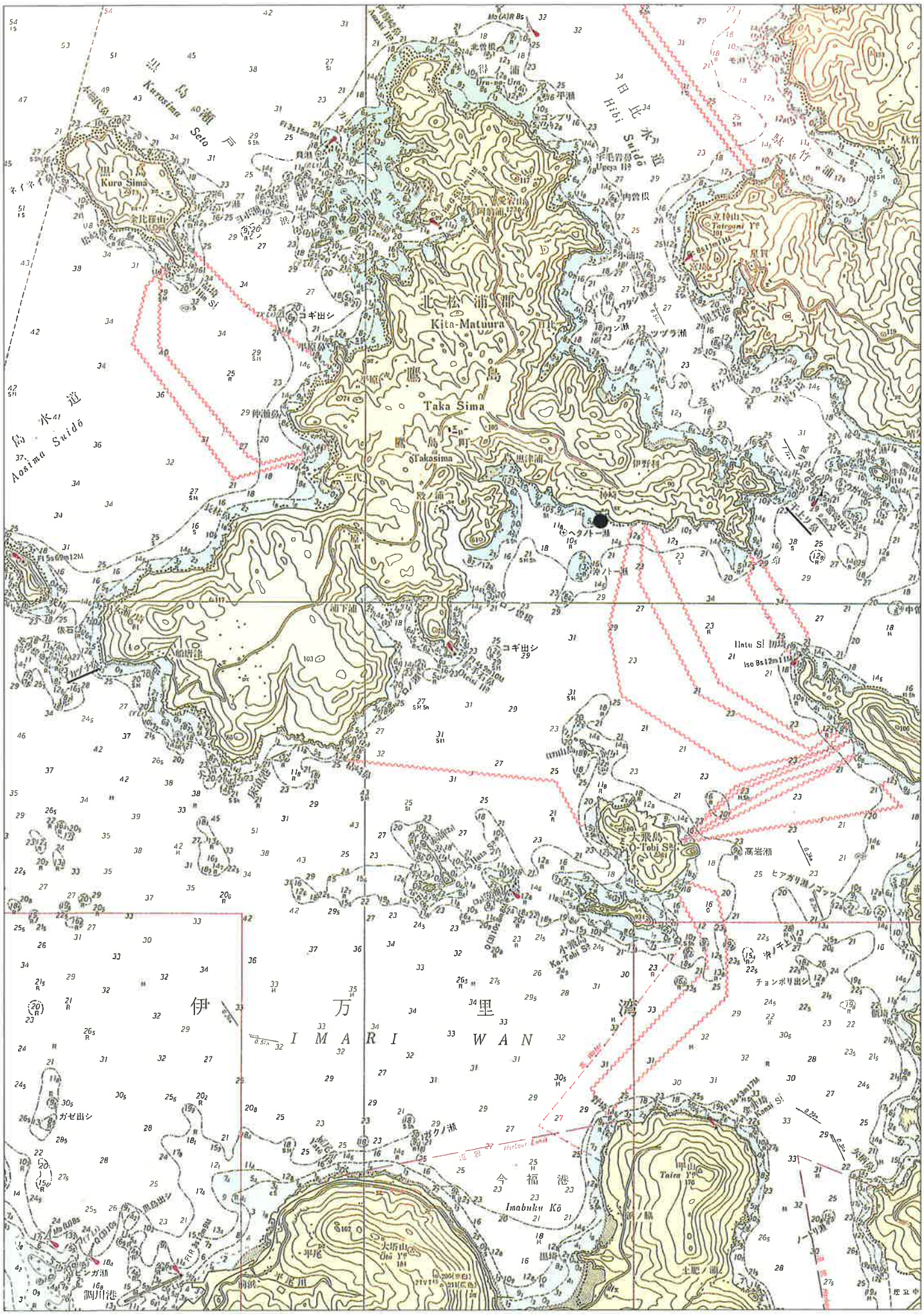


Fig. 1　調査地点位置図（海上保安庁水路部作成海図）（S＝1：50,000）

第１章　調査の概要

１　調査に至る経緯

鷹島町教育委員会は「鷹島海底遺跡」において元寇に関係する遺物を確認するため、1992(平成４)年から1999(平成11)年まで九州・沖縄水中考古学協会に委託し、発掘を伴わない目視による潜水調査を行ってきた。これをふまえ、今年度より文化庁（国宝重要文化財等保存整備費補助金）の補助を受け、海底に発掘調査区を設定し、調査を行った。今回の調査地点は、神崎港沖で教育委員会が九州・沖縄水中考古学協会に委託して実施したもので、1997(平成９)年と1999(平成11)年にそれぞれ行った第６次潜水調査区域と第８次潜水調査区域が含まれる地点である。また、1994(平成６)年度、1995(平成７)年度に行った神崎港改修工事に伴う緊急発掘調査の後、防波堤工事の設計変更により、今年度緊急発掘調査を行う事前の試掘調査として行った。

「鷹島海底遺跡」は1981(昭和56)年７月に「周知の遺跡」として定められ、鷹島南岸の干上鼻から雷岬まで東西約7.5km、汀線より沖合200mまでの範囲に含まれる約150万㎡の海域を指す。

この海域ではこれまで２度にわたる学術調査が行われている。「水中考古学に関する基礎的研究」が1980～82(昭和55～57)年に、つづいて「鷹島海底における元寇関係遺跡の調査・研究・保存方法に関する基礎的研究」が1989～91(平成元～２)年にかけて行われている。更に緊急発掘調査はこれまで11回行っており、そのうち発掘を伴う調査は６回行っている。最初の発掘調査は1983(昭和58)年７～９月、つづいて1988(昭和63)年９月、1989(平成元)年６～８月、1992(平成４)年７～９月にかけて床浪港改修工事に伴う緊急発掘調査、さらに1994(平成６)年11～12月と1995(平成７)年７～９月には神崎港改修工事に伴う緊急発掘調査を鷹島海底遺跡の２か所で行っている。

これまで「鷹島海底遺跡」で行われた学術調査や緊急発掘調査、および九州・沖縄水中考古学協会に委託して行った９次にわたる潜水目視調査で、元寇に関係する遺物を数多く確認している。とりわけ中国陶磁器が最も多く出土している。そのほか鉄刀、船釘、錫碗、石弾、石臼、片口乳鉢、磚、碇石、木製碇、木製品、竹製品、鉄製品等がある。またその数は非常に少ないが、銅鏡や高麗青磁も出土している。これらの出土遺物以外にも、縄文土器、近世陶器、肥前磁器、人骨および獣魚骨等がある。また最近の調査では、1994(平成６)年の神崎港の緊急発掘調査で２個の碇石が対になった大型や小型の木製碇が海底面より１m下がったシルト層で検出され、元寇船の碇の基本的な構造が明らかとなる成果をあげている。元寇船に関係する船体は未だ検出されていないが、沈没船の存在が想定できる木製碇の出土が神崎港沖で確認されたことは、神崎港海岸でパスパ文字を印面に持つ「管軍総把印」が採集されていることも考慮すれば、その意義は大きいといえる。

鷹島町教育委員会は、1989(平成元)年の床浪港改修工事に伴う緊急発掘調査から、九州・沖縄水中考古学協会の協力を得て調査を行ってきた。1992(平成４)年の床浪港の緊急発掘調査では、縄文早期の包含層を標高－25～－26mで確認した。この調査は世界的にも「鷹島海底遺跡」の重要性を喚起させたことはいうまでもないことである。さらに、1994(平成６)年から1995(平成７)年の２か年にわた

る神崎港沖の緊急発掘調査も、九州・沖縄水中考古学協会の協力なしには語ることはできない。

鷹島町は九州・沖縄水中考古学協会との間に「鷹島海底遺跡」を目視による潜水調査を行う委託契約を結び、元寇に関係する遺物の分布調査を1992(平成４)年、1993(平成５)年、1994(平成６)年、1995(平成７)年、1996(平成８)年、1997(平成９)年、1998(平成10)年、1999(平成11)年と行ってきた。今年度は神崎地区における第９次の調査となる。1995(平成７)年に九州・沖縄水中考古学協会の協力のもとに行った船唐津での潜水調査（鷹島海底遺跡潜水調査報告書Ｖ－船唐津漁港地区－1995）を含めると、この体制での調査は通算10回目となる。本報告は今回の発掘調査の結果を『鷹島海底遺跡調査報告書Ⅳ』としてまとめたものである。

2　調査の目的

鷹島は弘安４年(1281)の元寇の役で戦闘が行われ、元軍の数多くの船が伊万里湾で暴風雨が原因で沈没したといわれている。その歴史の舞台となった鷹島の南岸海域では、地元の漁師によって陶磁器を含む多くの元寇に関係する遺物が海底より引き揚げられているのは、周知の事実である。鷹島はアジア中世史のなかで日本と中国大陸あるいは朝鮮半島との対外交流の状況やその後どのような影響を諸外国や国内にもたらしたのか、この歴史的な事件を水中考古学の学問領域で解明すべく重要な手がかりを提供しているといえよう。

鷹島で起きた歴史的な事件を鷹島海底で証明することの意義は大きい。これまで人々の関心が少なかった海の歴史に水中考古学がおおいに貢献している。「鷹島海底遺跡」はパスパ文字の「管軍総把印」に代表される元寇に関係する遺物ばかりではなく、縄文早期の遺物が1992(平成４)年の床浪港の緊急調査で出土していることは、この「鷹島海底遺跡」が長期にわたって人間活動の痕跡を積み重ねていることがうかがえる。

今回行った発掘調査は、「鷹島海底遺跡」(神崎地区)の遺構および遺物をトレンチ調査によって確認する調査である。この地区では「管軍総把印」の青銅印が海岸で採集され、さらに1994(平成６)年の緊急発掘調査で、木碇の爪の先端部近くの外面に漢字が刻まれている木碇が浚渫で発見されている。この地区では現在でも多量の中国陶磁器が潮干帯や海底で採集できる。

このような理由から、鷹島町教育委員会は九州・沖縄水中考古学協会の協力を得て、1992(平成４)年６月27日・28日、1993(平成５)年７月23日～25日に潜水調査を実施した。さらに1994（平成６）年７月22日・23日、1995(平成７)６月30日～７月１日、1996(平成８)年６月28日～30日、1997(平成９)年10月24日～26日、1998(平成10)年７月17日～20日、1999(平成11)年７月16日～18日に行い、元寇に関係する遺物、特に磚や碇石破片を確認することができた。また1980(昭和55)年から1982(昭和57)年の３年間にわたって行われた文部省科学研究費による「水中考古学に関する基礎的研究」は、この神崎地区も対象区域となり、多くの遺物が海底から引き揚げられている。1994(平成６)年と1995(平成７)年の「神崎港改修工事に伴う緊急発掘調査」では、海底下１ｍで元寇当時の海底面を確認している。このとき、船の木碇および二組になった碇石を検出した調査区域のすぐ東側に、今回の発掘調査

地点は位置しており、1997(平成９)年の潜水調査(鷹島海底遺跡潜水調査報告書Ⅶ－神崎地区－1997)においても、碇石、青磁碗、磚などが確認されている。この潜水調査でとくに注目すべき点は、出土した碇石が一石型碇石であると想定できるもので、「鷹島海底遺跡」で数多くみられる二石分離型碇石（「鷹島型碇石」）と分類されるものには属しないものである。これはいわゆる、「博多湾型碇石」が中央部付近で欠損した碇石といえるものである。これまでこのタイプは「鷹島海底遺跡」ではごくわずかな例しか存在しない。1998(平成10)年の潜水調査（鷹島海底遺跡潜水調査報告書Ⅷ－神崎地区－1998）においては青磁碗、褐釉陶器、四耳壺、甕、磚、肥前系磁器など計19点が確認され、「鷹島海底遺跡」では最も元寇関係遺物が集中して確認できる有望な地点であるため、1999(平成11)年の潜水調査（鷹島海底遺跡潜水調査報告書Ⅸ－神崎地区－1999）でも黒釉碗、褐釉壺、磚、肥前系染付碗等が計７点確認されている。

このような地点で、鷹島町が初めて分布調査のための発掘調査を実施することは、文化財の包蔵地として周知された「鷹島海底遺跡」の規模、範囲や性格などを正確に把握し、今後の精密な海底調査を行う場合の重要な資料を提供することになる。

3　調査の組織

今回の発掘調査は鷹島町が九州・沖縄水中考古学協会に依頼し、長崎県北松浦郡鷹島町神崎免地先公有水面の海底で行い、発掘により元寇に関係する遺構や遺物の有無を確認し、記録するために行ったものである。調査の組織は鷹島町教育委員会を中心に九州・沖縄水中考古学協会と潜水士からなり、調査参加者は下記のとおりである。発掘調査は2000(平成12)年７月29日から８月７日まで10日間行った。今回も九州・沖縄水中考古学協会の多大な協力を得て、無事に発掘調査を終了することができた。

調 査 主 体

鷹島町

鷹島町教育委員会

調査参加者

１）林田憲三　（福岡市教育委員会、九州・沖縄水中考古学協会会長）

２）石原　渉　（日本習字教育財団、九州・沖縄水中考古学協会副会長）

３）塩屋勝利　（福岡市教育委員会文化財部、九州・沖縄水中考古学協会事務局長）

４）高野晋司　（長崎県教育庁文化課、九州・沖縄水中考古学協会運営委員）

５）常松幹雄　（福岡市教育委員会埋蔵文化財課、九州・沖縄水中考古学協会運営委員）

６）野上建紀　（有田町歴史民俗資料館、九州・沖縄水中考古学協会運営委員）

７）小川光彦　（琉球大学大学院、九州・沖縄水中考古学協会運営委員）

８）横田　浩　（九州・沖縄水中考古学協会運営委員）

９）林原利明　（伊志田高等学校、九州・沖縄水中考古学協会運営委員）
10）宮武正登　（佐賀県立名護屋城博物館、九州・沖縄水中考古学協会運営委員）
11）山本祐司　（水中写真家、九州・沖縄水中考古学協会運営委員）
12）加藤隆也　（福岡市教育委員会埋蔵文化財課、九州・沖縄水中考古学協会会員）
13）本田浩二郎（福岡市教育委員会埋蔵文化財課、九州・沖縄水中考古学協会会員）
14）庄田知充　（金沢市埋蔵文化財センター、九州・沖縄水中考古学協会会員）
15）北島健雄　（株式会社スマートバリュー、九州・沖縄水中考古学協会会員）
16）小野田康久（潜水士、九州・沖縄水中考古学協会会員）
17）三浦清文　（潜水士）
18）堤　一哲　（潜水士）
19）高崎　壽　（鷹島町教育委員会）
20）松尾昭子　（鷹島町埋蔵文化財センター・九州・沖縄水中考古学協会会員）

調査協力

長崎県教育庁文化課
県北振興局田平土木事務所
鷹島町水産商工課
鷹島阿翁浦漁業協同組合
大坪建設（株）

4　調査期間および調査日誌

自　平成12年７月29日（土）
至　平成12年８月７日（月）

調査日誌

７月29日（土）晴れ

11：30

林田、石原、小川、常松の協会員４名と、小野田、三浦の潜水士２名は福岡および長崎より、横田協会員は熊本から、野上協会員は有田から鷹島町埋蔵文化財センターに到着する。発掘調査でベースラインとして使用する長さ130mのクレモナ製白色ロープ、発掘調査区のグリッドに使用する４本のクレモナ製白色ロープ、直径20cmの橙色マーカーブイ５個を準備する。

14：00

本日の作業の打合せを行い、潜水作業班は作業船「日之出丸」に乗船し、神崎港より調査海域へ出発。陸上班は発掘調査区の設定のため、護岸堤の基準点Ａにトランシットを設置する。

15：00

作業船「日之出丸」は、神崎地区沖の発掘調査地点海域で、陸上班は測量器材を測量地点まで車で運ぶ。発掘調査区を設定するため、基準点Ａから離岸堤（７ｍ幅）の中央地点（3.5m地点）となる（基準点Ｃ）へ向けて、直線にベースラインのロープを西へ延ばす。この両基準点間の距離は134.306mを測る。基準点Ｃを護岸堤の真下の海底に移動させ、その地点にロープを固定する。海底に移動して、新たに設置した基準点Ｃと陸上の基準点Ａ間の距離は113.924mを測る。基準点Ａから基準点Ｃへ海底に110m延ばした地点を発掘調査区の０ｍ地点とし、この地点より東へ10m戻った地点（基準点Ａより100m地点）までを発掘調査区の東西の長さとし、０ｍ地点より南へ２ｍを調査区の南北の幅とした。これにより東西10m、南北２ｍに囲まれる20㎡が今回の発掘対象面積とする。発掘調査区を示す橙色のブイを110m地点と100m地点の海面に揚げる。

17：00

九州へ台風の接近が予想される状況となり、発掘調査区海域の風、波ともに少し強く高くなりはじめる。海底に設置したベースラインのロープは波浪による欠損を避けるために海底より回収し、護岸堤にある基準点Ａ付近に留め置く。この作業を完了して、本日の作業を完了する。埋蔵文化財センターで明日の作業の説明、打合せをする。石原、常松協会会員は台風接近のため予定を変更して福岡へ帰る。

７月30日（日）曇り

９：00

台風の九州接近は依然としてあるが、本日の調査作業ができる見通しとなったので、本日の作業の打合せを埋蔵文化財センターで行なう。

10：30

神崎港に待機する作業船「日之出丸」に警戒要員を乗せ調査海域へ向かう。調査区の外側に船を待機させ、漁船等が不用意に調査区に入らないように警戒する。昨日、海底に設置したベースラインの確認と、海底に設定したグリッドの設置状況及び調査区の現況を、水中ビデオカメラ及び35㎜カメラで記録するため小川、山本協会会員が潜水する。潜水士小野田、三浦の両名と横田協会会員も陸上から潜水して発掘調査区へ入る。

11：00

調査海域が台風の九州への接近のために風、波ともに強くなりはじめる。波高も50～100㎝になるが、調査作業を中止するほどの悪い条件ではない。昨日、波浪による影響を避けるため海底より回収し、基準点Ａ付近に留め置いたベースラインのロープを、海底に再度延ばす作業を行なう。林原協会会員が神奈川より到着。

13：00

台風接近で風波ともに強くなり、安全のため午後の調査を中止する。

７月31日（月）雨

10：00

調査海域の状況を調べるために現場に行く。台風のため午前中は風雨とも少しある。天気は午後には回復見込みであるが、午前中の調査は難しい。

10：30

作業船「日之出丸」に発掘調査で使用する機材を、潮汐を調べた上で満潮時の接岸設備の整った殿ノ浦港にて積み込む。

13：00

午後は発掘調査が可能となり、潜水機材の準備を行う。殿ノ浦港へ行き、小野田、三浦潜水士は作業船に乗り、発掘調査地点の神崎へ向かう。神崎港では、発掘調査地点に最も近い海岸に、テントの設営を行う。

14：00

発掘調査に使うドレッジの講習を行う。協会会員は初めての体験である。安全に海底で使用できるように機器に熟知する必要がある。協会会員は２組に分かれて潜水し、ドレッジの操作を体験する。林田、横田、林原協会会員の３人が最初に潜水し、操作を体験する。約30分で終了する。続いて、野上、小川協会会員が潜水する。無事体験が終了する。

16：00

作業を終了し、埋蔵文化財センターにもどる。夕方のフェリーで林原協会会員帰京する。

８月１日（火）曇りのち晴れ

９：00

埋蔵文化財センターで発掘調査の打合せを行う。作業船「日之出丸」は殿ノ浦港を出航して、調査区に近い神崎港に９：00に到着する。ここより調査地点に出航する。船には小野田、三浦の潜水士、野上、小川協会会員４名が乗る。

10：00

発掘調査を開始する。１組目の野上、小川協会会員、小野田潜水士が潜水開始、トレンチ１－Ａの発掘を行う。約45分の潜水時間で10㎝程度掘り下げを行い、潜水を終了して浮上する。海底は灰褐色の細かい砂が堆積している。ドレッジの吸い込み能力は決して十分ではない。片手を使用して「掘る」作業は、想像していたよりずっと泥質砂層が締まっているために、このままでは１週間内に２×10m内の５個のグリッドを完掘することは難しいと思われる。

11：00

２組目として、林田、横田協会会員、三浦潜水士の３人が潜水する。１－Ａ、１－Ｂのグリッドの発掘を行う。

14：00

午後の潜水調査を開始する。

８月２日（水）小雨

９：30

作業船が発掘調査地点に移動。

10：00

山本協会会員が発掘トレンチの現状写真を撮る。１組目の野上、小川協会会員、堤潜水士が潜水開始。１－Ｃのグリッドを掘る。第１層（20～30㎝に堆積している）を０ｍ地点から６ｍ地点まで（１－Ａ～１－Ｃ）を掘り下げる。

10：50

２組目の林田、横田協会会員、三浦潜水士の３名が潜水する。第１層の掘り下げを引き続き行う。

14：00

午後の発掘調査を開始する。引き続き第１層の掘り下げを行う。

16：00

調査を終了する。

８月３日（木）小雨のち晴れ

９：30

調査開始

10：00

山本協会会員トレンチの発掘状況撮影、野上、小川協会会員、堤潜水士が１組目として潜水する。３ｍ地点より1.7ｍ地点まで、グリッド１－Ａ、１－Ｂを掘る。

10：50

林田、横田協会会員、三浦潜水士が２組目として潜水し、1.7ｍ地点から０ｍ地点までをグリッド１－Ａを発掘する。

14：00

午後の発掘調査再開、野上、小川協会会員が潜水して104.0ｍから105.2ｍまでのグリッド１－Ｃを掘る。ほぼ１－Ａ～１－Ｃ間での第１層を完掘する。

15：00

林田、横田協会会員が105.2ｍから106.7ｍ地点までのグリッド１－Ｃを掘る。下層からは貝殻が混じる黄褐色細砂層（第２層）が現れる。

８月４日（金）晴れ

９：30

塩屋、加藤、本田協会会員が福岡から埋蔵文化財センターに到着。潜水器材、調査器材等の準備の後、調査現場へ。この３名は午前中、発掘調査の作業を見学するために調査船に乗る。

10：00

作業船「日之出丸」は発掘現場に行き、海底に機材を下ろす。ドレッジをトレンチに設置する。フー

カーの運転を開始する。

10：05

山本協会会員はトレンチ発掘の現況を写真撮影のため潜水する。

10：08

野上、小川、庄田協会会員潜水。14：45に終了。110m地点から108m地点までの１－Ａグリッドを中心に掘り下げを行う。

15：00

林田、横田会員１－Ａグリッドの発掘。15：49に終了。

16：20

今日の調査終了

８月５日（土）晴れ

10：00

庄田、本田協会会員と堤潜水士は第１組目として潜水し、１－Ａグリッドの掘り下げを行う。

10：30

野上、小川協会会員が第２組目として潜水する。

11：00

林田、横田、宮武協会会員は、第３組目として潜水する。11：30に潜水終了する。

14：15

庄田、本田協会会員と堤潜水士は、午後の第１組目として潜水し、１－Ａグリッドの掘り下げを行う。

15：00

野上、小川協会会員が午後の第２組目として潜水する。

16：00

林田、横田、宮武協会会員は午後の第３組目として潜水する。16：30に潜水を終了する。４層から褐釉壺胴部の破片（PL.9）と（PL.10）が出土した。

８月６日（日）晴れ

９：57

宮武、横田協会会員、三浦潜水士は第１組目として潜水し、トレンチの第４層の発掘を行う。その間、山本協会会員は発掘状況を水中カメラで記録するために潜水する。

10：30

野上、小川協会会員は第２組目として潜水する。引き続き、第４層の発掘を行う。11：15に潜水を終了する。本田、庄田協会会員は第３組目として潜水する。

14：10

宮武、横田協会会員、三浦潜水士、午後第１組目の潜水。14：48に潜水終了する。

15：10

本田、石原協会会員潜水を開始する。

15：40

潜水終了し、今日の調査終了。

8月7日（月）晴れ

10：30

神崎港に行き、作業を開始する。作業船を離岸堤に接岸させる。山本協会会員が潜水し、トレンチの土層断面(PL.7)の写真を撮る。土層断面はベースライン上の110m～106m間の北側面の土層である。

10：45

山本協会会員のカメラに不具合が生じ、潜水をいったん中止し、カメラのチェックをする。再度潜水し、撮影を終了する。午前中、野上、小川協会会員による土層実測のためのレベルの水糸を張る。午後、野上、小川協会会員による土層図実測(PL.8)。引き続き林田、石原、横田協会会員による土層の実測を行う。

5　調査区域(Fig. 2)

今回の発掘調査地点は、長崎県北松浦郡鷹島の南岸7.5kmに及ぶ周知の遺跡として定められた海域にあり、その所在は鷹島町神崎免地先公有水面となっている。発掘調査地点は1992年から連続して行った潜水調査地点からすると、西寄りの地点に位置している。この地点は平成6年(1994)と平成7年(1995)に行われた緊急発掘調査地点の東側にある。さらに平成9年(1997)と平成11年(1999)の目視による潜水調査区域に囲まれた場所である。

1994年と1995年の緊急発掘調査後にこの地点には東西に延びる離岸堤が建設された。この離岸堤は東側の延長工事が計画され、この計画に沿って田平土木事務所、鷹島町水産商工課等の強い要望もあり、その結果今回の発掘調査を、試掘調査として調査することとなった。今回の調査地点は、鷹島における第1次文部省科学研究による調査や、1997年及び1999年の潜水による目視調査でも多くの元寇に関する遺物が確認されている。そのため当初から多くの遺物が発見されるものと考えられた。

今回の発掘調査地点の周辺地形は、神崎港を挟む二つの丘陵の東側丘陵の端部に位置し、海底は潮干帯付近ではこぶし大の礫に覆われているが、しだいに南の沖側へ行くにしたがって水深は増し、－5m付近では大きな礫群に変わる。最深部の海底は水深が約13mあり、灰褐色細砂の泥質となっている。調査区の設定にあたっては、陸上から離岸堤に向かって海面上に出ている堤防上面の東端の中央地点（基準点C）へのベースラインを設定するため、陸上の測量地点としての基準点A及びBの設置は事前に大坪建設に依頼した。調査区の設定にあたっては、陸上に測量可能な条件を持った場所を決定するために、神崎港平面図（1／500）をもとにして発掘調査区を設定した。

第２章　調査の方法と概要

１　調査の方法

調査区設定(Fig.２：PL.１－２)

発掘調査地点は、長崎県北松浦郡鷹島町神崎地区にある、神崎港の東側に位置している（Fig.2)。この地点は第７次潜水調査(1997)と第９次潜水調査(1999)の潜水調査区内に含まれる場所である。調査対象地点は、水深13mの海底の20m²の面積である。調査区の設定は以下の手順で行った。

調査区の設定では、まず陸上の基準点Ａ(PL.1)にトランシットを立て、基準点Ｂを視準する。この２つの基準点の距離は50mである。このベースラインから左へ44°０′０″の角度をとる。この角度から離岸堤をのぞくと、離岸堤東端の横幅の中央地点（基準点Ｃ）までの距離が134.306mとなる。この距離は離岸堤の上面の長さであるが、この離岸堤の基礎部は東側へ大きく張り出しているため、基準点Ａから海底の離岸堤基礎部までの距離は短くなる。そこで海底に基準点Ｃを移すと、その距離は基準点Ａから113.924mとなる。これを第２のベースラインとした。(PL.2)

今年度の緊急発掘調査対象区域の範囲内に試掘トレンチを設定するには、基準点Ａ(０m)から第２ベースライン上の100m地点と110m地点間の東西10mの距離を試掘トレンチの長軸とした。この長軸ラインに直交する南北ライン２mを、調査トレンチの短軸とした。これにより発掘調査対象面積は２m×10mの規模となる。この調査トレンチはさらに２m×２mの小グリッドに分け南北を１とし、東西の長軸を西側より２m毎にＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｅと付けた(Fig.2)。標高の基準地点は神崎港護岸堤にKBM(Fig.2)が設置され、5.020mと測られている。このKBMより発掘調査地点の真上の海上に停泊している作業船「日之出丸」へレベルを短時間のうちに移動させ、ここより海底面にレベルを降ろした。後に土層断面を実測するために、海底に11.5mの測量の基準となるベンチマークを設置する。発掘調査区を示す橙色のブイを100m地点と110m地点の海面上に揚げる。これは海底作業を、他の船に周知させるためのものである。これらのブイ以外に発掘調査地点に安全に潜行できるように、ブイの付いたガイドロープを調査地点の海面に設置する。ちなみにこれらのマーカーブイは、調査終了後回収し、調査海域より撤去した。また、海底の試掘調査区のグリッドを示す白色のロープを、グリッドの東西、南北に設置する。

調査方法（Fig.３：PL.３－5,6)

２m×10mの調査区をさらに５個の小グリッド（２m×２m）に分け、それぞれのグリッドを１－Ａ～１－Ｅとし、調査員と潜水士の計17名によるドレッジによる発掘調査を行なう(PL.6)。１－Ａグリッドから開始し、発掘を担当する調査員と海底の安全作業を監督する潜水士を１グループとする調査班を、３班作る。35㎜水中カメラによる発掘調査を記録する担当者を、１名配した。各班の調査員は、１班を野上、小川両調査員と小野田、堤潜水士からなる。２班は林田、宮武、石原、横田の調査員と三浦潜水士からなる。３班は本田、庄田の両調査員と堤潜水士が調査の後半で組織された。

発掘調査と並行して塩屋、高野、野上、加藤、宮武、小川調査員は、遺物の散布状況を調べる目的で、1999年に行なった潜水調査区域を再度調査した(PL.5)。調査の間断を利用し、以前の分布調査範囲も含めて、再度目視観察を行った。今回の発掘調査の後半を使って潜水調査を行い、よい成果をあげることができた。発見された遺物は、褐釉陶器(PL.3)磚(PL.4)とであった。

海底で遺物が見つかると光波測器を使い、海底からミラーを取り付けたスタッフを立て、基準点Aと基準点B、KBMを使用して遺物のベースラインからの角度基準点からの距離とレベルを測り(PL.5)、遺物の出土位置を記録した。海底での遺物の確認状況は、山本調査員によりスチールカメラにて写真撮影を行った後回収した。

潜水調査区域の透視度は決して良好でなく、透明度は約3mである。調査区域の海底は、北の陸地側から沖の水深が増すにつれ礫、砂、シルト混じりの砂質を呈する。調査区の水深は最も深い箇所で13mである。

2　調査作業の安全対策（Tab.1）

(1)　調査中の調査補助及び安全対策として警戒船を調査対象区域に常時待機させ、他の船舶に十分注意し試掘調査を行うことにする。

(2)　警戒船はその船上に、国際信号旗A旗を示す標識や形象物を掲げ、警戒員を配備する。

(3)　海上の状況を天気予報等で事前に調べる。

(4)　緊急事故発生時の連絡一覧表を作成する。(Tab.1)

Tab.1　緊急事故発生時の連絡一覧表

3　調査作業の安全基準

(1)　下記事項時には作業を中止する。

風速　12m／秒以上の時

波高　1.5m以上の時

(2)　その他

大しけの時には、警戒船は鷹島町殿ノ浦港を避難港として定め回避し、しけがおさまるまで待機する。

4　調査の成果

1980年以来、この海域で学術及び緊急調査が行われているが、「鷹島海底遺跡」における内容確認調査は、今回が初めてである。そのため、調査対象面積を事前に確定させることは困難であった。今回の発掘調査は10日間の短い期間であったが、グリッドを設定した海底を層序的に掘ることができた。海底を層位的に厳密におさえながら掘ることが、今回の調査の最大の目標であったので、この課題に期間中、結果を出せたことはこの調査がまずもって大きな成果をあげたことといえる。

土層（Fig.3：PL.7）

グリッド1－A～1－Eの当初の発掘計画は、台風の接近のため作業の一時停止とドレッジの予想以上の機能の悪さが影響して、これらすべてのグリッドを掘ることはできなかった。しかしこの状況下で、1－A～1－Cは第1層を掘ることができた。この第1層は灰褐色細砂層で20～30cm堆積している。この層の下は第2層であるが、グリッド1－Aでのみ確認できた。第2層は黄褐色細砂で小さな貝殻が少量混じる層で、25～35cmに堆積している。この層は若干のシルトが混じっているのもその特徴となろう。この第2層の下は第3層の灰褐色砂となり、第2層より大きな形の貝殻が多く混じっている。この層は30～40cmの厚さに堆積している。この第3層の下には灰色粗砂が堆積している第4層がある。この層は第3層の貝殻より比較的大きな貝殻が多く混じっていて、10～15cmに堆積している。第4層下は礫を含んだ基盤層となっている。グリッド1－Aでは現海底面から約－1mの堆積層があり、第4層から元寇に関係する遺物2点が出土した。1点は褐釉壺の胴部破片である(PL.9)。表面全体には貝殻は被われていなく、断面には磨滅が少ない。器表面の釉は、本来の光沢を失っているが、全体に薄く遺存する。もう1点は磚である(PL.10)。この磚は1／2ほど欠損している。表面全体はかなり磨滅が認められるが、貝殻の付着が全くないといってよいほど見当らない。灰色を呈する。焼成はやや焼きがあまい。以上の2点が今回の発掘調査で出土した遺物である。残念なことに、第4層のどの地点で出土したかはドレッジが稼働中でトレンチ内の視界がほとんどゼロに近い状態であったため、確認することができなかった。しかし、第4層から出土した可能性が高いものである。このことから今回の発掘調査の結果、第4層が元寇に関係する遺物を含む包含層と考えることができる。この事実はこの年10月から11月にかけて行われた神崎港沖の離岸堤延長工事に伴う緊急発掘調査に生かされることになった。

今回、発掘調査以外に確認した元寇に関係する遺物は全部で23点ある。そのうち褐釉壺の口縁部片１点と２点の褐釉陶器の底部がある。これ以外の遺物はすべて磚である。これらの遺物についてさらに詳しく以下で述べることにする。

出土・表採遺物(Fig.2：PL.11－33)

褐釉壺の口縁部片(No.3：PL.13)

口縁から肩部にかけ１／３弱が残存する壺の破片である。海底の礫群の上で確認した。東側のグループに属する。この破片が確認された位置は基準点Ａからベースラインより左へ320°51′10″で、距離52.022mである。標高は－2.854mを測る。

褐釉壺の底部(No.4：PL.14)

貝殻が表面全体に被われている。No.3の褐釉壺の口縁部片の近くで確認した。東側のグループに属する。確認された位置は基準点Ａからベースラインより左へ304°42′40″で、距離53.146mである。標高は－2.922mを測る。

褐釉壺の底部(No.12：PL.29)

貝殻が全体に被われているが、No.4より少ない。他の２点から西側へ約25m離れた地点で確認した。東側と西側のグループに挟まれた位置にある。発見した位置は、基準点Ａからベースラインより左へ313°07′30″で、距離58.312mである。標高は－2.608mを測る。

磚(No.1：PL.11)

この磚は全体的に貝殻が多量に付着している。端部がわずかに欠損している。焼成は良好である。長さと横幅の比率は約10：３となる。今回確認した磚では東側のグループに属する。発見した位置は、基準点Ａからベースラインより左へ299°28′00″で、距離は50.551mである。標高は－3.129mを測る。

磚(No.2：PL.12)

この磚は全面に貝殻が付着するが、多くはない。磨滅はある。１／２が残存する。磚(No.1) に近接した場所で確認した。東側のグループへ属する。発見した位置は基準点Ａからベースラインより左へ299°44′30″で、距離50.073mである。標高は－3.077mを測る。

磚(No.5：PL.15)

この磚は全面に貝殻が付着するが、一箇所に集中している。磨滅はあるが、焼成は比較的良い。全長の約１／２が残存している。確認した場所は東側のグループ内で、最も陸地に近い海底である。その発見した位置は、基準点Ａからベースラインより左へ299°28′00″で、距離は37.521mである。標高は－1.363mを測る。

磚(No.6：PL.16)

この磚は全面が貝殻で被われている。磨滅は若干ある。全長の約１／２が欠損しているものと思われる。東側のグループに属する。確認された位置は基準点Ａからベースラインより左へ301°31′00″で、距離は43.119mである。標高は－1.813mを測る。

磚(No.7－①、7－②、7－③、7－④：PL.17－20)

4個体が一箇所にかたまった状態で確認された。磚(No. 5)の西約2m離れた場所で、東側のグループに属する。これら4個体のうち3個体①－③はほぼ完形に近い状態にある。貝殻は全面に付着している。発見した位置は、基準点Aからベースラインより左へ328°54′10″で、距離は約39mである。標高は－1.370mを測る。

磚(No.8：PL.21)

この磚は全面に貝殻で被われている。先端部がわずかに欠けているが、ほぼ完形に近い。西側のグループに属する。確認された位置は、基準点Bから35. 993m、角度はベースラインより右へ99°18′40″となる。標高は－0.807mを測る。

磚(No.9－①、9－②、9－③：PL.22－24)

3個体が一箇所に集中して確認された。貝殻に被われているが、その量は少ない。3個体の法量はわずかな違いがあるものの、ほぼ完形品である。これら磚は、確認された場所で西側のグループに属する。これらの磚が発見された地点は、基準点Bからベースラインより右へ97°35′10″で、距離は34.009mである。9－①～③のどれにあたるのか不明。表面の一部に貝殻が付着している完形の磚である。発見した地点は、基準点Bからベースラインより右へ98°50′00″で、距離は23.361mである。標高は－0.851mを測る。

磚(No.11－①、11－②、11－③：PL.26－28)

3個体が一箇所にまとまって確認された。全面に貝殻が付着している。確認された場所は、褐釉壺の底部(No.12：PL.29) が確認された位置からわずか西へ20cmほど行った地点で発見された。この位置は、東側のグループと西側のグループとの間に挟まれている地点である。3個体とも1／2かそれ以上欠損していて、残存状態は良くない。発見した地点は基準点Aからベースラインより左へ313°52′10″で、距離は、58.552mである。標高は－2.631mを測る。

磚(No.13－①、13－②：PL.30－31)

2個体がまとまって確認された。全面に貝殻が付着している。13－①はほぼ完形であるが、13－②は1／2以上が欠損して、残存状態は良くない。確認された位置は西側のグループに属する場所である。これら発見地点は、基準点Bからベースラインより右へ101°28′00″で、距離は34.390mである。標高は－0.954mを測る。

磚(No.14：PL.32)

この磚は全面に貝殻に被われている。完形に近いが、両端部がわずかに欠損している。確認された場所から、この磚は西側のグループに属する。発見した位置は、基準点Bからベースラインより右へ101°54′10″で、距離は34.521mである。標高は－0.922mを測る。

磚(No.15：PL.33)

この磚は全面を貝殻に被われている。一端がごくわずかに欠けているものの、ほぼ完形に近い磚である。確認した位置は西側のグループに属している。発見した位置は基準点Bからベースラインより

右へ103°34′50″で、距離は35.376mである。標高は－1.042mを測る。

まとめ

磚は今回の調査でも21点確認できた。神崎地区の磚に関しては1997年の目視調査で３点、また1998年と1999年の目視調査でもそれぞれ４点ずつ確認している。神崎地区以外では1989年に行われた床浪地区の緊急調査報告書において８点が報告されている。これらの磚は比較的まとまった状態で出土している傾向が窺える。磚の使用方法を考えたとき、竈の材料として船上で使った可能性が最も高い。表面に漆喰が付着している磚も出土している。船のバラストとして使用した可能性があれば、海底で大量に集中して出土しない限り、今のところバラストとしての使用を「鷹島海底遺跡」で証明することは難しい。

しかし、磚は船体と切り離しては考えられないため、これらが集中して出土する地点では船体が存在する可能性が十分にある。今回の調査では碇石は発見されなかった。

「鷹島海底遺跡」の元寇に関係する遺物は700年間にその多くの遺物が海底下に埋没している。そのため海底面で発見される遺物は多くない。一方、今回の発掘調査の最大の成果は、神崎港沖の海底下に埋没した元寇に関係する遺物が、第４層（現海底面から－80～100cm間）で確認できたことである。日本の水中考古学の現状を考えると、今回の「鷹島海底遺跡」の発掘調査は将来にわたって元寇の歴史を解明していくための調査方法の一つであるといえる。

Fig. 2　鷹島海域と調査地点位置図（1/25,000）

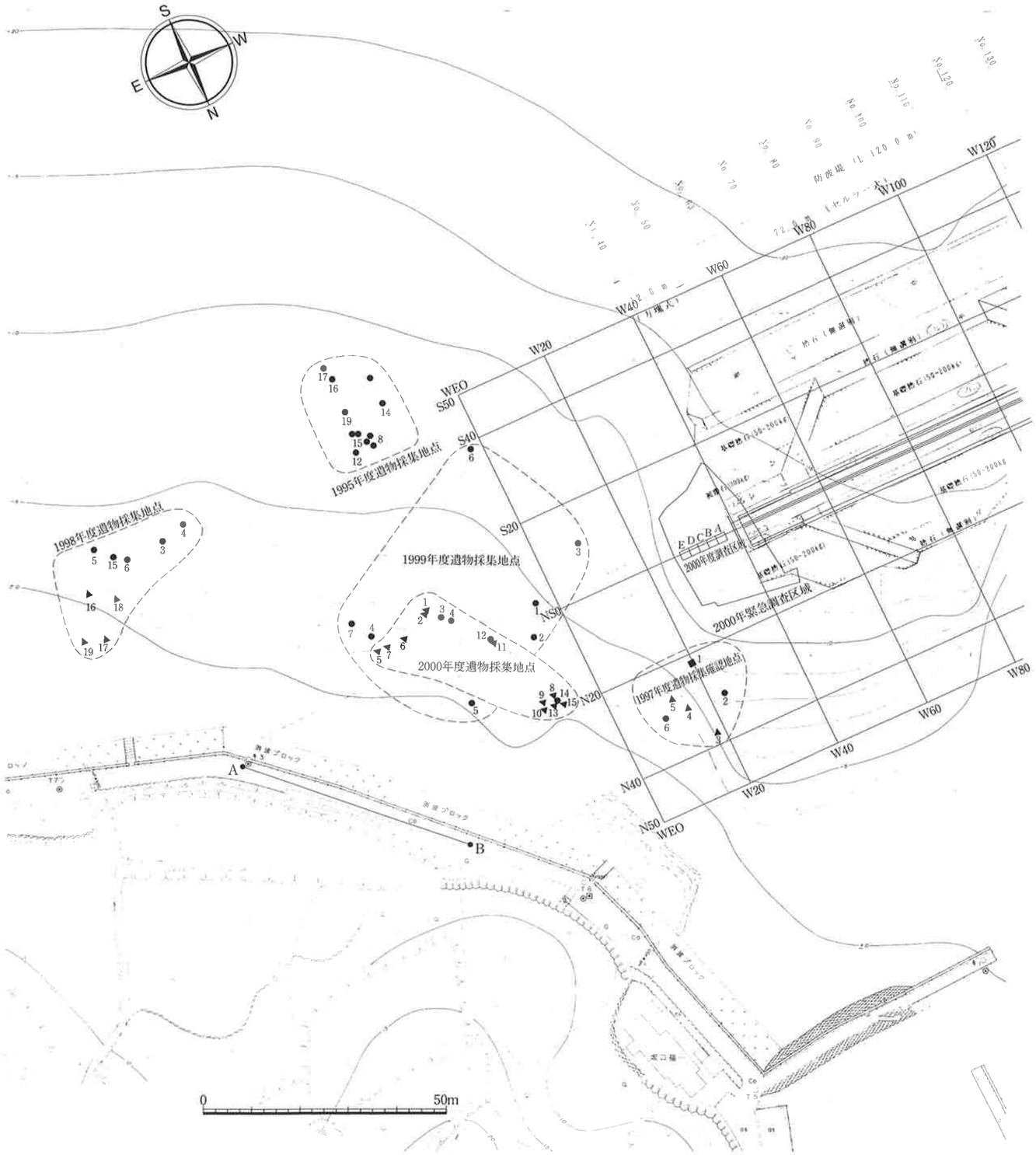


Fig. 3　調査位置と遺物採集地点位置図（1/1,000）

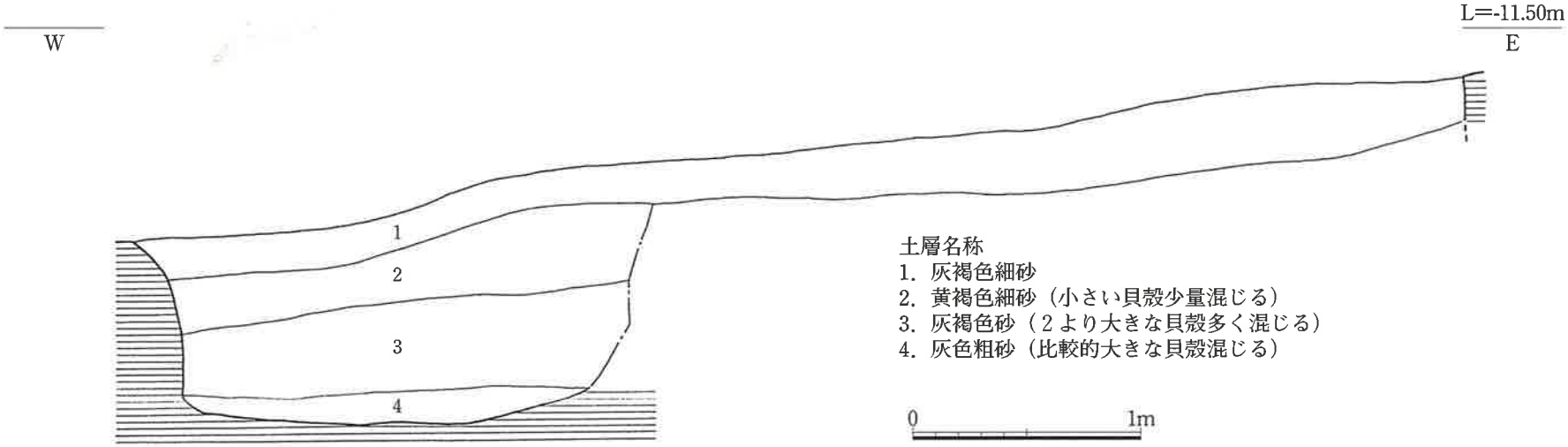
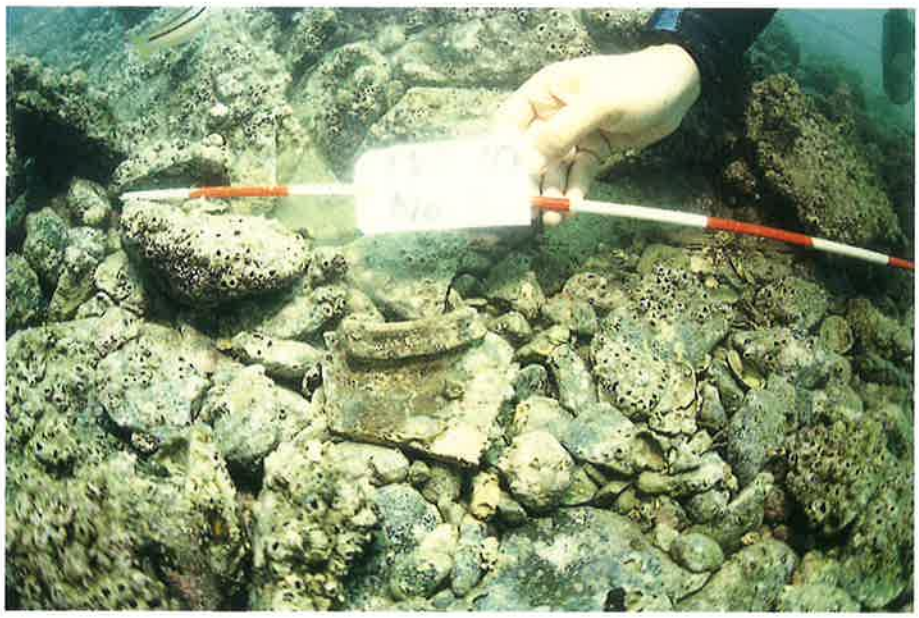


Fig.4　1－A～C トレンチ北壁土層断面図

PL.1
基準点Ａの設置風景

PL.2
基準点Ａより離岸堤へ
ベースラインを延ばす

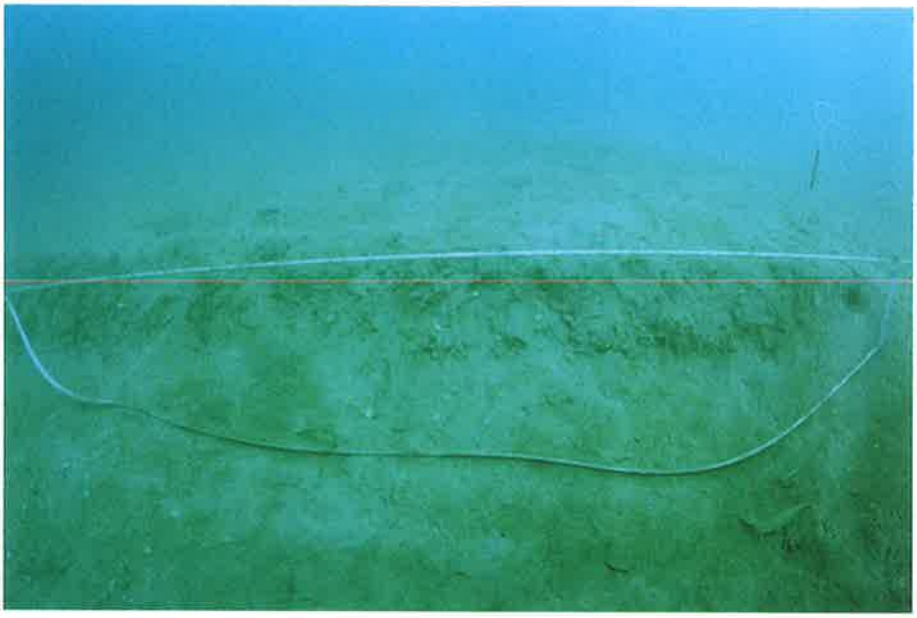


PL.3
褐釉陶器四耳壺(No.3)
確認状況

PL. 4
磚(No. 9) 確認状況

PL. 5
遺物確認地点計測風景

PL. 6
1－Aグリッド発掘風景

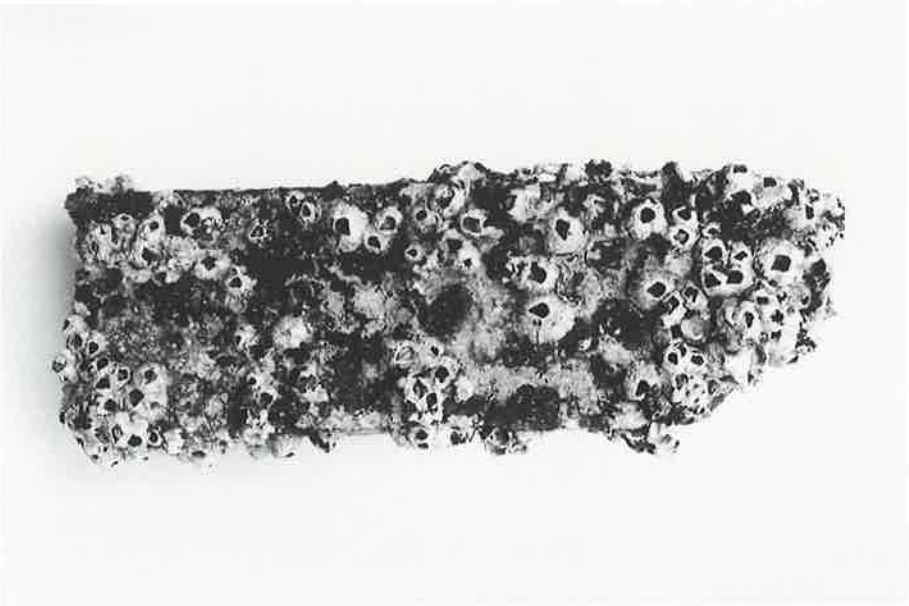


PL.7
１ーＡグリッド
北壁土層断面

PL.8
土層断面実測風景

PL.9
調査グリッド出土
褐釉陶器

PL. 10
調査グリッド出土磚



PL. 11
No. 1 磚

PL. 12
No. 2 磚

PL. 13
No. 3 褐釉陶器四耳壺

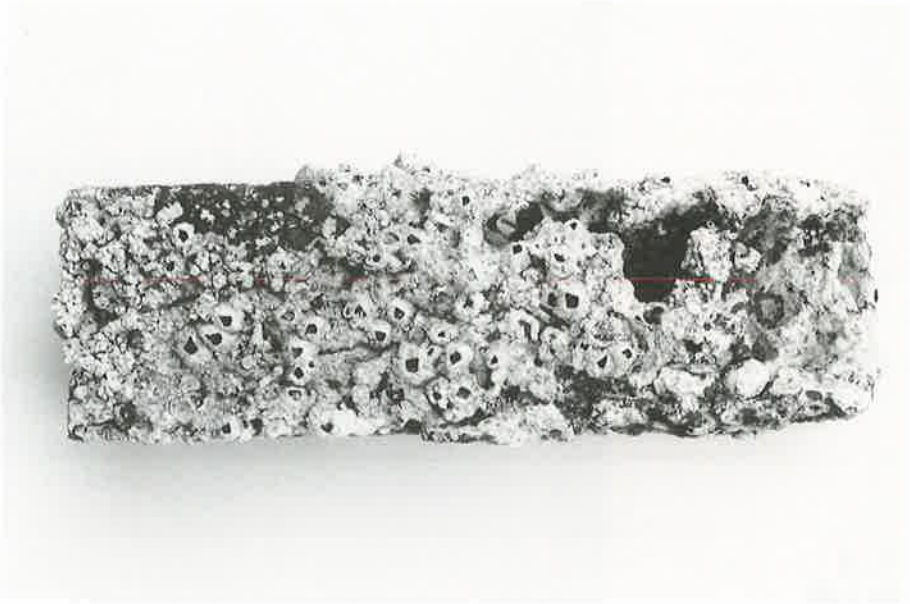
PL. 14
No. 4 褐釉陶器壺

PL. 15
No. 5 磚

PL. 16
No. 6 磚

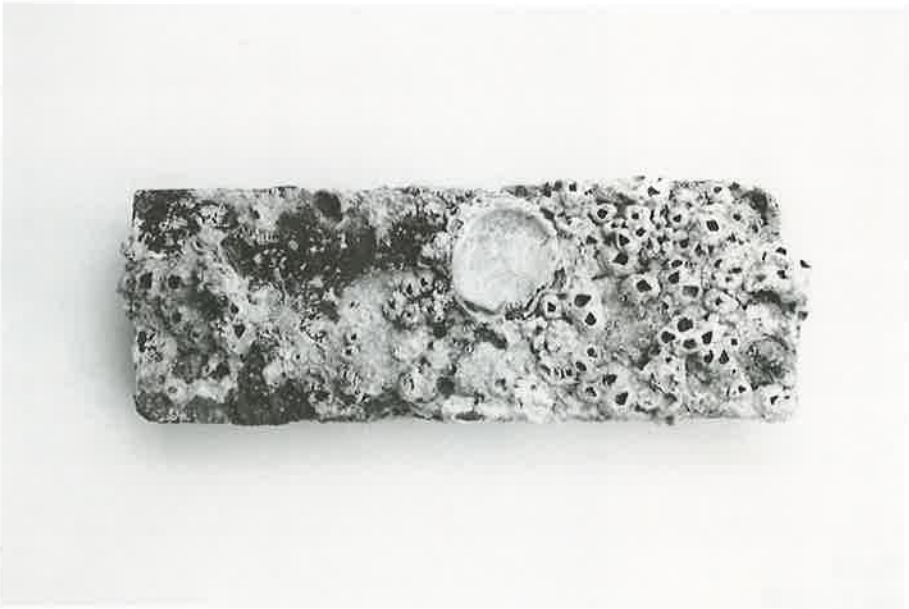
PL. 17
No. 7 ―①磚

PL. 18
No. 7 ―②磚



PL. 19
No. 7 ―③磚

PL. 20
No. 7 ―④磚



PL. 21
No. 8 磚

PL. 22
No. 9 ―①磚

PL. 23
No. 9 ―②磚

PL. 24
No. 9 ―③磚

PL. 25
No. 10磚

PL. 26
No. 11－①磚

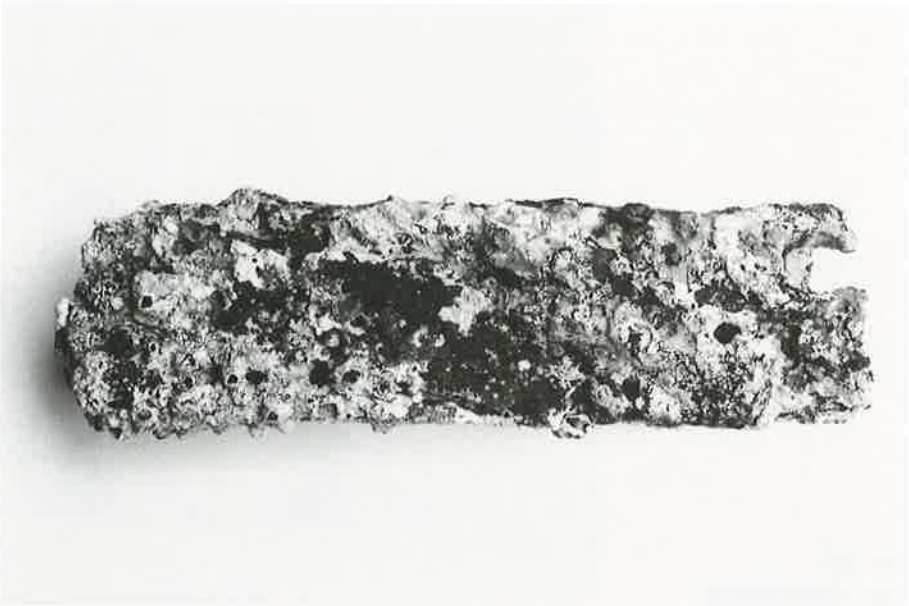
PL. 27
No. 11－②磚

PL. 28
No. 11—③磚

PL. 29
No. 12褐釉陶器壺

PL. 30
No. 13—①磚

PL. 31
No. 13—②磚



PL. 32
No. 14磚

PL. 33
No. 15磚

報告書抄録

ふりがな	たかしまかいていいせき
書名	鷹島海底遺跡Ⅳ
副書名	鷹島海底遺跡内容確認発掘調査報告書①
巻次	鷹島町文化財調査報告書第３集
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著名者	松尾昭子
編集機関	鷹島町教育委員会
所在地	〒859-4303　長崎県北松浦郡鷹島町神崎免146
発行年月日	西暦2001年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たかしまかいていいせき 鷹島海底遺跡	ながさきけんきたまつうらぐん 長崎県北松浦郡 たかしまちょうちさきこうゆうすいめん 鷹島町地先公有水面	42387	20	33°25′	129°45′	2000.7.29 ～ 2000.8.7	20m²	遺跡の内容確認

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺跡	特記事項
鷹島海底遺跡	包蔵地	中世		・磚 ・褐釉陶器	水深－13m 潜水調査

鷹島海底遺跡Ⅳ
2001

発　行　鷹島町教育委員会
長崎県北松浦郡鷹島町神崎免

印　刷　株式会社　昭　和　堂
長崎県諫早市長野町1007－2